

Title	日本語における格標示法の歴史的変化についての研究
Author(s)	後藤, 睦
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/76318
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (後藤 睦)

論文題名

日本語における格標示法の歴史的変化についての研究

論文内容の要旨

本論文は、日本語における格標示法の歴史的変化を取り上げ、その変化の一端を明らかにすることを目的とする。そのために、本論文では、主語と連体修飾を標示する形式であるノとガ [→(1)(2)]、および有形の格標示の形式がないゼロ形 (φ記号によって示す) [→(3)]、広義の目的語を標示するニとヲ [→(4)] について取り上げた。

- (1) a. わが思ふ人はありやなしやと (古今和歌集) 右近が言はむこと (源氏物語)
b. とはざりける人の来たりける時 (古今和歌集) ひたすら袖の朽ちにけるかな (源氏物語)
- (2) a. わが恋 君が手 人麿が歌 (以上、古今和歌集)
b. 衣通姫の流 人の心 蜘蛛のふるまひ 歌の文字 三笠の山 (以上、古今和歌集)
- (3) 遠つ人松浦佐用姫φ夫恋に領巾φ振りしより (麻通良佐用比米φ都麻胡非尔比例φ布利之用利) (万葉集871)
- (4) 大坂に遇ふや娘子を道φ問へば (袁登売袁美知φ斗閉婆) 【大坂で出会った乙女に道を尋ねると】 (記歌謡77)

(1)(2)に示すノ・ガは、古代日本語において、どちらも主語標示用法・連体修飾用法として用いられている。このノ・ガは、現代日本語においては用法によって使い分けられるようになっており、何らかの変化があったものと推測される。即ち、現代日本語において、ガは主語標示用法へと収斂しており、ノが用いられるのはある特定の条件下(「人の来た時」のような連体修飾節内部において)のみにおいてである。いっぽう、ノは連体修飾用法として用いられ、ガが連体修飾をおこなうのは「わが友」「君が代」などの固定化した表現のみにおいてであり、生産性はほぼなくなっている。このようなノ・ガにおける歴史的な変化について、これまでの研究においては検討されてこなかった。

また、(3)のようなゼロ形は、古代日本語において、主語である名詞句にも目的語である名詞句にもどちらも確認されていた。このゼロ形は、現代日本語においても主に口頭語で確認されるものの、古代日本語におけるゼロ形についての先行研究は未だ少なく、検討の余地があるといえる。

(4)は、現代日本語ではニで標示される名詞句がヲによって標示されている点で現代日本語とは異なる状況を示している。このような、現代日本語とは異なる格標示法となっている動詞は他にもあるものの、その変化について検討されてこなかったものもある。

「格」という文法現象は、どの言語の文法書においてもまず記述される、言語の中核をなす文法現象であるといえる。しかし、古代日本語の格、および古代日本語から現代日本語にかけての格が共時的にどのようにあり、そして歴史的にどのように変化してきたか(あるいは、してこなかったか)という点についてはこれまで十分に整理されてこなかったといえる。

その理由のひとつには、方法論的な問題も存在していたと考える。従来の研究においては、電子データの未整備といった方法論的な制限があったと考える。ノ・ガが特に顕著であるが、格助詞は使用頻度が高いために出現数が非常に多く、複数の資料を横断的に調査するにあたって困難が伴っていたと考えられるが、近年、「日本語歴史コーパス(CHJ)」のような大規模コーパスの整備が進み、複数の資料に出現するノ・ガについて横断的・大規模な調査をおこなうことが容易になりつつある。このような潮流を背景とし、本論文ではコーパスを用いて古代日本語の格標示をあらためて見直し、歴史的な変化について検討した。

本論文は2部構成となっている。第1部においては(1)(2)に挙げたノ・ガを、第2部においては(3)(4)に挙げたゼロ形およびヲ・ニをそれぞれ取り上げた。本論文で述べたことは以下の通りである。

【第1部 上代から近代におけるノ・ガの歴史的変化】

第1部においては、ノ・ガにおいて生じた変化について、上接語の制限の崩壊と用法の分化を中心として論じた。

まず、第1章では、上代から近代にかけてのノ・ガの変化について、上接語の制限とその崩壊という観点から示した。記述する過程では時代を4期（第Ⅰ期～第Ⅳ期）に分け、それぞれの時代に確認されるノ・ガの分布とその変化の概観をおこなった。第Ⅰ期（上代・中古）においては、先行研究が指摘する通り、主語標示用法・連体修飾用法の両用法ともガは代名詞・固有名詞に、ノはそれ以外の名詞にそれぞれ下接するという名詞の種類に基づいた分布となっており、名詞の種類による上接語の制限が存在していたことを示した。第Ⅱ期（中世）の覚一本『平家物語』以降、主語標示用法のガ、主語標示用法・連体修飾用法のノの上接語が拡大しはじめることを指摘した。そして、第Ⅲ期（中世末期）において、主語標示用法のガがほぼすべての上接語で、連体修飾用法のノが代名詞以外の上接語でそれぞれ主流になることで、ノ・ガは上接語による意味的な使い分けから、主語標示・連体修飾それぞれの用法に分化して統語的な使い分けに移行し、第Ⅳ期（近世～近代）においては名詞の種類に基づく分布は完全に崩壊することになることを示した。

第2章においては、第1章で述べたことを承け、人間名詞を中心として、ノ・ガの分布とその変化について述べた。まず、第Ⅱ期の『宇治拾遺物語』において人間名詞に下接するガが増加することについて述べた。この人間名詞に下接するガの特徴から、ガは個性性・照応性の高い人間名詞に下接するようになったことを示した。そして、第Ⅲ期以降、人間名詞に下接するノ・ガの分布が尊卑へと変化していることを指摘した。また、第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけて、固有名詞に下接するノとガが、名詞の種類に沿った分布（第Ⅰ期）から尊卑に基づいた分布（第Ⅱ期）へと変化していることを示した。また、このノ・ガの分布が名詞の種類から上接語の尊卑へと変化していくことについて、第Ⅰ期においてガが下接する傾向にあった名詞の特徴、即ち個体を指示することとの関連から変化の原因を述べた。

第3章においては、第Ⅱ期以降におけるノ・ガの上接語の制限の崩壊について、人称代名詞と無生物名詞を中心として検討をおこなった。その結果として、上接語の制限の崩壊から用法に基づくノ・ガの分化という変化においては、第2章で示したような尊卑がかかわるものもあれば（二人称代名詞）、用法や節タイプといった要因がかかわるものもある（無生物名詞）ことを示した。そして、第Ⅱ期の覚一本『平家物語』以降においては、尊卑に基づくノ・ガの分布と、用法に基づくノ・ガの分布とが混交していたことを示した。

第4章では、第Ⅱ期・第Ⅲ期といった中世期におけるノ・ガについて、主に用法面からの検討をおこなった。この章では、第Ⅱ期の覚一本『平家物語』以降、中止節に出現するガが豊富に確認されるようになり、ガが主語標示用法へと分化するきざしがあったことを明らかにした。そして、ノではなくガが主語標示用法として選択される理由について、ノの連体修飾用法の広さの点から指摘した。さらに、名詞の種類による上接語の制限の崩壊と用法の分化について示した。即ち、名詞の種類による上接語の制限は、『宇治拾遺物語』において生じた人間名詞に下接するガの出現を契機とし、用法に基づくノ・ガの使い分けという分布が生じたことによって崩壊することを指摘した。

第5章では、『宇治拾遺物語』において、ノ・ガが尊卑に基づいて使い分けられるという規範意識について取り上げ、実態との対照をおこなった。まず、『宇治拾遺物語』において、ノ・ガは尊卑のみに基づいて使い分けられるわけではないことを示した。ただし、『宇治拾遺物語』「さたが衣」において見られる規範意識は、第2章において述べた実態としてのノ・ガ尊卑の生成へとつながり得、規範意識から実態へと言語の変化に影響を及ぼしたことを指摘した。

【第2部 その他の格標示形式の諸問題】

第2部においては、ノ・ガ以外による格標示法について扱った。

まず、第6章においては、(4)に挙げた「松浦佐用姫ゆめ夫恋に領巾のうす振りしより」の「松浦佐用姫」のような、主語となる名詞句がゼロ形となる現象について、有形のノ・ガとの対照から出現し得る条件についての検討をおこなった。その結果、有形であればガ相当で標示される人称代名詞や固有名詞、およびノ相当で標示される人間名詞においてはどの節タイプにおいても有形で標示される比率が高いことを示した。つまり、ヒトを示す名詞においては有形で標示されやすい傾向にあるということである。その一方、動物名詞・無生物名詞は、連体節であれば有形が優位であり、その他従属節の場合ではゼロ形の割合が高いことをそれぞれ示した。この章では、ヒトを示すか否か、またどのような節タイプであるかによって、有形かゼロ形かの選択率に影響がある可能性があることを指摘した。

第7章では、「大坂に逢ふや娘子を道問へば」のような、現代日本語とは異なる格標示法について述べた。まず、古代日本語における「質問する」意味の動詞「問ふ」の格標示法がヲからニへと交替する様相を示した。この交替は上代から中古のあいだにおいて生じており、この交替は、古代日本語における格助詞ヲの標示し得る意味役割が収斂する一過程に位置づけられることを示した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (後 藤 睦)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 金水 敏
	副 査 大阪大学 教授 岡島 昭浩
	副 査 大阪大学 准教授 岸本 恵実
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 日本語における格標示法の歴史的変化についての研究

学位申請者 後藤 睦

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	金水 敏
副査	大阪大学教授	岡島 昭浩
副査	大阪大学准教授	岸本 恵実

【論文内容の要旨】

本論文は、上代から近世にかけての日本語資料において、名詞句の「格」がどのように標示されるか、またそれがどのような歴史的変遷を経たかという点について論じたものである。

構成は、大きく「第1部 上代から近代におけるノ・ガの歴史的変化」「第2部 その他の格標示形式の諸問題」「おわりに」に分かれる。第1部は、「序章」「第1章 上代から近代におけるノ・ガの分布とその変化」「第2章 人間名詞・固有名詞における上接語の制限とその変化」「第3章 人称代名詞・無生物名詞における上接語の制限とその変化」「第4章 ノ・ガの用法の分化をめぐる」「第5章 ノ・ガ尊卑説をめぐる「規範」と「実態」」「終章 ノ・ガの変化をめぐる」からなる。第2部は、「第6章 古代日本語におけるゼロ形の出現について」「第7章 古代日本語における「問ふ」を述語とする構文の格標示形式の変化について」からなる。

第1部は、格助詞ノ・ガの上接語の制限の崩壊と用法の分化を中心に論じている。第1章では、上代から近代にかけてのノ・ガの変化について、上接語の制限とその崩壊という観点から現象を整理している。すなわち、記述する時代を第Ⅰ期から第Ⅳ期に分け、それぞれの時代に確認されるノ・ガの分布とその変化の概観を行っている。その結果、第Ⅰ期（上代・中古）においては主格標示用法・連体修飾用法の両用法とも名詞の種類に基づいた分布となっており、名詞の種類による上接語の制限が存在したことを示しているが、第Ⅱ期では主語標示用法のガ、主語標示・連体修飾用法のノの上接語が拡大し始め、第Ⅲ期中世末期では主語標示用法のガがほぼすべての上接語で、連体修飾用法のノが代名詞以外の上接語でそれぞれ主流になることを示している。第2章・第3章においては、第1章を承けて、中世期におけるノ・ガの分布とその変化について述べている。すなわち、第2章では第Ⅱ期では人間名詞に下接するガが個性・照応性の高さを経て尊卑へと変化したことを、また第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけて、固有名詞に下接するノとガが、名詞句階層に沿った分布から尊卑に基づく分布へと変化したことを示している。第3章では、第Ⅱ期以降の資料では、ノ・ガの分布が尊卑に基づくものと用法（主語標示用法か連体修飾用法か）に基づくものの両方が見られることを示している。第4章では、第Ⅱ期の覚一本平家物語以降、中止節に出現するガが豊富に確認されるようになり、ガが主格標示用法へと分化する兆しがあったことを明らかにし、ノではなくガが主語標示用法として選択される理由についても示している。第5章では、『宇治拾遺物語』におけるノガが尊卑に基づいて使い分けられるという規範意識について採り上げ、実態との対照を行っている。

第2部においては、ノ・ガ以外による格標示法について取り扱っている。第6章では、「松浦佐用姫の夫恋に領巾の振りしより」の「松浦佐用姫」のような、主語となる名詞句がゼロ形となる現象について、有形のノ・ガとの対照から、出現し得る条件についての検討を行っている。その結果、ヒトを表す名詞であれば有形（格助詞付き）で標示されやすい傾向にあるとしている。その一方、動物名詞・無生物名詞は、連体節であれば有形が優位であり、その他従属節の場合ではゼロ形の割合が高いことをそれぞれ示している。第7章では、「大坂に逢ふや娘子を道問へば」のような、現代日本語とは異なる格標示を採り上げ、「問ふ」の「問いかけの相手」の格標示法がヲからニへと交替する様相と位置付けについて示している。「おわりに」では、第1部、第2部の内容をまとめている。

【論文審査の結果の要旨】

本論第1部で扱ったノ・ガの意味・機能変化は、現象面としてはよく知られた日本語文法史上の重要問題であるにも関わらず、十分な精査がこれまで行われてきたとは言いがたい状況にあった。それは一つには、ノ・ガの上接名詞句の意味（指示性、ウチ・ソト、尊卑等）、主語標示か連体修飾標示かという用法の違い（さらには主語標示でも主節か、連体修飾節内かという統語的環境）といった要因が複雑に関わっている上に、ちょうど変化が起きたとされる時期の資料が十分に得られないという制約や、ノ・ガの用例数がある程度の分量になるため、悉皆調査に困難を来してきたという手法上の制約があったためである。この点において、本論文では、近年特に発達した歴史コーパスを活用して綿密な悉皆調査を実行した上で、ノ・ガの分布を決めるとされる要因を丹念により分けて、その適否を着実に示すことに成功している。ことに、上代語におけるノ・ガの上接名詞句の意味的な分布がいわゆる「シルバースティーンの名詞句階層」の適用によって説明できること、その制約の崩壊が本論で言う第Ⅱ期で兆しを見せ、第Ⅲ期ではほぼ完了したという時期の問題を特定できたことの成果は大いに評価できる。また、同時代資料においていくつか言及のあるノ・ガの尊卑による使い分けについては、第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけて人間名詞・固有名詞にその区別が認められる一方で、『宇治拾遺物語』においてはその実態と、説話に現れた「規範意識」との間に乖離があったとの指摘も意義深い。

一方で、いくつかの問題点についても指摘しておく。本論では、「主語」「目的語」「格」といった基本概念をほぼ無定義で用いているが、これらの概念は、拠って立つところの統語理論に大きく依存するものであり、定義によっては現象の捉え方や立論に大きく影響を与えるので、著者の見解を改めて問いたいところである。また「シルバースティーンの名詞句階層」が本論では大きな位置づけを占めているが、オリジナルの名詞句階層を著者はかなりの程度改編しており、その点も踏まえて、この名詞句階層が何を意味しているのか、また先行研究との関連がどのようなものであるのかが問われるところである。さらに第1部に比して第2部は分量的にも叙述の密度の点でもやや見劣りがするところであるが、ゼロ助詞と有形格標示との関係は日本語文法にとって大変重要な問題であり、さらには係助詞の体系も含めて、統語論・情報構造の両面から論じられなければならないので、今後の展開が待たれる。「問ふ」の格体制についても、類似の現象との比較や他言語・方言との対比も含めて、今後の論の展開を望みたい。

ただし、このように問題点を容易に指摘できるのは、本論文がきわめて組織的に構成されていることと表裏の関係にある。今日の学界の研究水準に照らしても本論文の到達点はゆるぎないものがあり、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する次第である。